



<最近思うところ>「起伏の向こう」(2000.4.11・高校入学式)

両国という地名は、みなさんもお存知のように、隅田川を境に、武蔵の国と下総の国に分かれていたことからきています。

人々は舟を渡し、橋をかけ、交流してきました。

川岸、際辺の地は異文化との交流の前線となり、また、その地域固有の文化の堤ともなってきました。

川は、幾万年かの地形の起伏をなぞりながら、今も流れています。

川で隔てられた二つの国ではありますが、川底の地形ではつながっております。

われわれの暮らしも、人類の未来も、この川の流れるように、あらゆるものが連続としてつながり、この中に生き、活かされていくべきものだと、私は思っています。

みなさん方の年代は、川に喩えれば、源流からの一滴一滴を集め、勢いを増した溪流にあたるのではないのでしょうか。この川も徐々に、暮らしの場の水をも集め、とうとうたる大河となり、社会という大海原に流れ出でていきます。

これからの高校生生活は、自己の生き方を確かなものにしていく時です。

自己の流れを探り、見失うこと無く生き抜く、そのための強さ、柔軟さをもっていたきたい。

平凡であっても自らの思いを持続し、努力することは、川の流れのように形となり、周辺を潤すものとなります。

川を境に対岸を眺め見る姿勢ではなく、今を、この場を逃げることなく、現実をわがものとして受け止める姿勢、ここから、他者をも受け入れるゆったりとした大河、個性の波が輝く海原へとつながっていくものと思います。

<最近思うところ>「竹と紙・たおやかに」(1999.5.東京消防・みどりと遊ぼう)

古来、日本は木で居を構え、米でいのちを養うなど、植物を暮らしの中心に据えた国でした。

障子、襖、提灯、扇子、傘など、竹や紙の使いこなしをみても、美と用を見事に調和させていました。

竹は主として熱帯、亜熱帯に分布し、日本が北限です。3ヶ月で成木になる生命力、節に空洞、草にも木にも属さない形態。数十年に一度の開花。竹は独特の特徴をもつイネ科の植物です。

風が吹き、竹がざわつく。葉擦れの音やゆらぐ様に幽玄なもの、神秘性さえも感じさせてくれます。

その材の性質は素直で、撓りがあります。割る、削ぐ、曲げるなどが容易なことから、細工や加工をし、広く利用してきました。

建築材、箆、物指、計算尺、熊手、竹行李、団扇、柄杓、尺八、茶筌、箒、弓、竿、簾、馬簾、等々。

竹林には地下茎が発達し、土砂崩壊を防ぐ保護林としての役割があります。筍

は食材として今でも利用されています。

一方、紙もしなやかで美しく、保存性にすぐれたものが作り出されてきました。紙は、紀元前中国で発明されました。原料は麻でした。その後日本にその技術が入り、楮、雁皮、三桎の表皮繊維が用いられるようになりました。中でも楮は土地を選ばず日本風土にも合い、各地で作られました。また紙すきは農閑期の冬の仕事としてでき、すぐ現金化もできることから、江戸期には地方の特産品となり、江戸の情報文化を支えてきました。

障子や襖など、紙を用いた生活は外界や周囲と一体になった暮らし、作法ある暮らしを根づかせ、日本の誇る紙文化を築きました。障子は太陽の光を取り入れ、湿度を調整し、外界と呼吸します。襖も心の仕切り、美的な世界を作り上げてきました。時々の暮らしの風景をも演出します。

この竹や和紙を利用した古人のたおやかな暮らしぶり、知恵を学ぶことも大切なことと思います。

そこで子供と一緒に楽しみ、考えるきっかけとなる簡単な工作「ビンビン蟬」を紹介しましょう。

材料は直径2～3センチの竹、ガムテープ、ビニールテープ、たこ糸、竹串、どんぐりの実を用意してください。

糸電話を作る要領で竹を数センチ輪切りにし、片方をガムテープでふさいで、たこ糸を20センチ程度つけます。ビニールテープでガムテープの周囲を押さえま

す。竹の余り材や木の実で羽と目をつけ、蟬のできあがりです。次に竹串の先端に木の実をつけ、その付け根部分に松脂を塗ります。最後にたこ糸の先端部分を輪に結び、竹串にかけ木の実を中心に蟬を回転させると、竹串とたこ糸でできる振動により蟬がビンビンとうなり鳴き出します。

<最近思うところ>「春の五選譜」(1999.3.私の環境教育ブックセルフ)

春という語から思い浮かぶ本が私には数冊ある。あれば安心できる本、なつかしく勇気づけてくれる本である。

『風景』・純銀もざいく

山村暮鳥、「日本の詩歌・13」中公文庫、1975年、680円

『風景』は「いちめんのなのはな」という言葉が連なる詩である。高校の時、担任の先生がこの詩を書にされていた。情景の表現法、ことばあそび、書風、みな新鮮だった。暮鳥の詩集では『風は草木にささやいた』が好み。

『沈黙の春』

レイチェル・カーソン、青樹築一訳、新潮文庫、1974年、552円

「はる」の語源はいのち漲る「張る」にあるという。大学時代、「サイレント・スプリング」は暗示的で、サークル仲間と議論した。4半世紀たっても化学薬品の生物濃縮は深まるばかり。命懸けの警世の書だったことをあらためて知る。

『春と修羅』

宮沢賢治、「校本・宮沢賢治全集・2」筑摩書房、1973年、3000円

社会人になって購入した初めての全集。賢治にひかれ「風景は涙にゆすれ」とふと独りつぶやいたりした。近年の賢治ブームはうれしくもあり、疑問視もしてい

る。耕作体験により、賢治さんの想いに近づきたい。

『雪国の春』

柳田國男、「定本柳田國男・2」筑摩書房、1968年、2500円

退屈にまどろみ、障子越しの陽の光にも感動した子どもの頃。さまざまな原体験を揺り起こしてくれる書。暮らしや自然、郷土への関心をいつまでも支えてくれそうで、筑摩書房の定本が我が家の居間に今も鎮座する。

『五体不満足』

乙武洋匡、講談社、1998年、1600円

最近の感動本。桜咲く季節、著者の出生シーンからこの本は始まる。両親や彼を支えた周囲の人との交流から「自分でしかできない役割」、使命に目覚めていく過程が綴られていく。

「教育とは」、「生きるとは」を考えさせられた本。「早稲田いのちのまちづくり実行委員会」の活動も参考になる。

自然のことには関心を示さない子が夢中になって読んでいた。この本のお陰で親子の新たな会話が生まれた。

(社団法人日本環境教育フォーラム・地球のこども・3月号)

<最近思うところ>冬を彩る(1998.12.都道府県展望・趣味の園芸)

冬の季節となってきました。ここしばらく恒例の年中行事が続きます。日本古来の冬至、正月、七草、節分に、新たな行事としてのクリスマス、バレンタインと。特に12月は、世界中の町々がクリスマスカラーである緑と赤、金銀の色で飾られ、賑わいと暮らしの節目を感じさせてくれます。

ときわにあかく

色彩の乏しいこの季節、常盤や実の赤・黄は、洋の東西を問わず神聖視されました。冬至を例にとれば、西洋では常緑で赤い実をつけるヤドリギ、セイヨウヒイラギが、日本では赤の小豆や黄色のカボチャ、ユズが儀式に用いられてきています。これらは、太陽や生命への畏敬、そして健康を願う思いを込めたものであったといえます。

日本の正月を飾る松竹梅や福寿草は、身近な草木の象徴として、節操、素直、純潔、幸福、長寿といった日本人の美意識、心情を草木に託し、広く親しまれてきました。商売繁盛を願う木もあります。センリョウ(千両)、マンリョウ(万両)は有名ですが、これにツルコウジ(一両)、ヤブコウジ(十両)、カラタチバナ(百両)を加え、最後には「お金があり通し」とアカネ科のアリドオシまで揃えることもあります。これらはみな赤い実で常緑の木です。

ななつなのくさ

ところで、春の息吹きを愛でる風習の一つに正月七日の七草粥があります。

この行事は中国からのもので、平安期は若菜を汁物として食べていましたが、室町期に七種粥や禅宗の影響もあって粥となり、食べ物で邪気をはらう七草行事として庶民にまで広まったのは江戸時代とのこと。使われた若菜は、歌にあるように「セリ、ナズナ(ペンペン草)、ゴギョウ(ハハコグサ)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ(コオニタビラコ)、スズナ(カブ)、スズシロ(ダイコン)」の七つです。これらはあぜ道や庭先、畑の野菜と全て身近な植物で、古人の食生活の知恵、春を待ち望む思いが伝わってきます。そして、七草を植えた竹の箆を両天秤に目一杯ぶらさげ、江戸市中を練り歩いた植木商の売り声や、それを買って

める庶民の嬉々とした姿を想像してしまいます。
七草は、現在でも、ちょっと郊外に足をのばせば見つかるものばかりです。出来合いのものを飾ったり、食してみるのも楽しいことですが、野に出かけ自分だけの春を探す、そしてそれを活ける、これは新鮮で健康的な遊びです。七草には若菜摘みの楽しみもありました。今風の七草を考案したり、野遊びに興ずるのもおもしろいかと思います。

はるめぐむ

昔の人にとって、年中行事は、農耕や暮らしの一つの区切りでした。
日の短い冬は、寒くつらい季節です。障子越しのさゆらぐ光や行燈の灯かり、炉の温もり。これらを頼りに縄を緋い、糸を紡ぐ。家代々の繁栄を願い、黙々と手仕事に励む。家族総出の餅つき、そして正月。トンドにマツリを納め、草木萌えいずる春に備えます。連綿としたいのちの流れの暮らしでした。
赤い実は薄らぎ、芽ぐみへと移ろう、そこはもう春です。

<最近思うところ>インターネットと私(1998.10.東京都公園協会報・風)

パソコンを人並みにと購入したのは一昨年である。キーを3本指で打つありさまだから、この手の機械は苦手といえる。
字が汚い自分にとって、ワープロは単純に代筆道具として重宝するのだが、パソコンはいろんな機能があるも、その価値とは何かと、狭い我が家を占拠した機械を前に考えることもあった。

唯一、興味をそそられたのは通信機能であった。それを体験するためにプロバイダーと契約、うわさのインターネットの世界に。あるわあるわ、政府から個人まで、宣伝、主張、呼びかけ、誘い、商取引と雑居している。みなそれらしく家を構えている。
インターネットには、覗き見的快感と個人の情報発信の自由感、公平感があると思った。

自分も発信してみたいくなる。ホームページづくり入門本と付録CD-ROMでなんとか作り上げた「Pote Pote Club」。昨年3月に発信開始。
Pote Poteは、当時ハイキング部活動や試行錯誤的思いがポテポテ歩きに思え、そこから命名した。

この5月、柳絮が飛び散る様に感動し、それを伝えたいとウェブページに「水元通信」を組み入れ、その後、日々の感想や自然情報を載せている。あてもない虚に向いメッセージする衝動は、自分の中の公意識のなせるものかもしれない。

<最近思うところ>このはなあそび(1998.9.東京消防・みどりと遊ぶ)

名は体を表わす。草木につけられた名前からその植物のことを知るのも楽しいことです。
植物の名のあらわし方は和名・学名・別名・漢字表記・外国名などがあります。

例えば、東京都のマークになっているイチヨウですと、いちよう(和名)、銀杏・公孫樹(別名、漢字表記)、Ginkgo biloba(学名)、鴨脚(漢名)、Maidenhair Tree(英名)となります。
おもしろいことに、これらの名前は関連をもっています。「いちよう」は漢名「鴨

脚・ヤーチャオ」の転訛だといわれ、学名のGinkgoは「銀杏・ギンナン」の誤った音読み「ギンキョウ」に基づき、さらに、GinkjoとすべきをGinkgoと誤植されたもののだといえます。名のつけ方もお国によって様々。日本は中国原産の木であることから外来語的になり、本家中国では、葉の形が鴨の脚を連想してつけられたのでしょ。英語のMaidenhairは乙女の髪の意味で、葉の縦筋の葉脈がそれと思わせます。

名の種類について、もう少し詳しく紹介しましょう。

和名は日本語での正式名でかな表示されます。かなに統一されたのは、江戸時代、本草学者が漢名を使いましたが誤りが多く、その混乱を避けるためといえます。

しかし、漢字表示は根強く続き、文学や生活の場で使われています。その漢字にも中国の名前としての漢名そのもの表現したもの(例・ヒマワリ＝向日葵)、漢字の意味から用いられているもの(例・マツヨイグサ＝待宵草＝夕方開花する)、漢名を音読みしたもの(スイセン＝水仙)、日本で作った文字、国字によるもの(例＝椿、萩)などがあります。

この他、方言による呼び方や奈良・平安時代に用いられていた古名や園芸品種につけられる雅名というものもあります。古名で「あさがお」はキキョウのことで、意外な表現に驚かされます。雅名は園芸界独自のもので、ツバキ、ツツジ等の品種物に見られ、加茂川、乙女の舞、紫雲殿など、魅惑的な名がつけられています。

国際的な植物名として学名があります。

植物分類学でいう基本単位としての種とその上の段階の属で表現されます。例えばムクゲは *Hibiscus syriacus*。前が属で後が種を示し、ラテン語表現です。学名の中に *yedoensis* や *japonica* などの覚えのある語が含まれているとうれしくなってきます。

草木の名の背後には、民俗や歴史があり、東西文化の一端を垣間みることができます。

そしてこの小さな知的な散歩が、みどりと温もりの言の葉に満ちたまちづくりにつながればと思います。

<最近思うところ> 水元公園緑の相談所だより(1998.8.都市公園)

1.相談所の役割

公園緑地行政には、みどりを守る、増やす、育てる等の役割がある。その中で、相談所はみどりのことを知り、親しむことにより、みどり豊かなまちづくりにつながる組織ではないかと思う。

そのため相談所として、講習会の開催、相談業務、広報活動、募金、ネットワークづくりなどを行っている。

しかし、これらを行政目標としての都市緑化、環境保全へつなげるには、参加者のみどりに対する意識の段階的な過程を踏まえた配慮が求められる。

そこで、今、当相談所で試みている新たな動きを紹介する。

2.凜とした中に親しみある相談所運営

①<関心>迎えるところを大切に

来館者への声かけや館内外の清掃の励行、玄関等に季節の花の展示、昼休み時間の電話対応等。
初めての方にも親しめる施設になるよう職員全員協力しあっている。

②<興味>新鮮な情報を提供

公園内にある10数箇所の掲示板、玄関や館内のインフォメーションポール、ボードを活用してのイベント、自然情報を週単位で更新。
この他、インターネット(私個人のホームページ上)による日々の発信。等

③<学習>環境学習につながる催し物の実施

緑の探検隊(野草、動物、樹木の観察)、緑の教室(カルチャーもの。暮らしの中のみどり)、園芸教室(植物の栽培・育成)、講演会(社会的テーマ)の4本を柱に年間の学習カリキュラムの体系化に挑戦中。

④<体験>参加型の相談所運営

染織り教室(暮らしの中のみどり、自然とのつきあい方を考える)、青空園芸教室(即席講習会。相談と実習のリンク)、花の市(余剰材の活用。交流の場。都市緑化への参加意識醸成)、ミニ菜園教室(日常管理の講習会化)、ガーデニングボランティア(公園管理、相談所運営への市民参加)、出前講座(地域との連携・展開)等の実施により、相談所を趣味的な関心の場から人・情報・緑のふれあいの環、交流公益の場としたい。

3.行動する相談所づくりをめざして

相談所周辺には、樹木園、苗圃、花菖蒲見本園、水生植物園、神社跡、草地広場、小合溜、バードサンクチュアリーなど、都市緑化植物園として機能しうる多様な環境が存在する。

また、花菖蒲や金魚の育種といった江戸園芸的素地、江戸川水郷自然公園の面影、など歴史性もある。

これらは相談所の貴重なフィールド資源でもあるとの認識にたち、管理事務所と調整を図りながら、その管理運営面からのビジョンづくりを利用者と一緒に進める考えである。

さらに、戸山相談所で試行した行政・住民・企業が参加するまちづくり、グラウンドワーク活動や教育施設等との連携による環境教育の展開など新たなグリーンカルチャー運動の拠点、行動する相談所を目指したい。

(参考までに水元通信のwebページは <http://www.tky.3web.ne.jp/~potepote/>)

<最近思うところ> 染織り教室・リーダー講座・要旨(平成10年7月14日13:00~15:00)

織物は編み物と違い、たくさん糸を直交させてできた長さ、幅、厚みをもつ繊維製品である、との定義があります。

その織物の歴史をみると、人類の有史以来からのもので、最初は、繊維から糸を作ることを身につけました。

狩猟生活の中で、身近にあった獣の毛を用い、縄を撚る技術を確立し、それをさらに網へと発展させ、狩猟生活に役立てたものと思われまます。

動物以外にも、植物繊維を用い、特に麻の利用が多かったといわれています。

その後、撚りを能率的に行うため、独楽様の紡輪と紡錘(スピンドル)という紡ぎ道具を見出し、繊維の連続化に成功します。
紡輪は、中央にあなの空いた小円盤として、世界各地で発見された。エジプトの壁画に描かれた絵から、これが紡ぎの紡輪であることがわかりました。
日本でも登呂遺跡から紡輪が発見されており、紡ぎの歴史は古くから世界中で広く行われていたことの証といえましょう。

ところで、糸から織物への移行はどのようなものだったのでしょうか。
文献によりますと、古代人は、生活の道具として、蔓や竹で籠や箆を考案し、その編む技術から、縦横直交する織りへ発展させたのではないかと推測しています。

縦糸と横糸を直交して織り成すため、最初は立ち木を利用して縦糸を上から垂らすことにより、横糸作業を行うという方法がとられ、これが堅機として普及したようです。今でもこのような織り方をインドあたりではしているといえます。

しかし、この堅機だと長く織れない。そこで経糸を巻き取りながら織る水平機が発明され、より機械らしくなっていました。
まず、糸に上下関係を作るため1本ずつ交互に棒を通すことにより経糸を開口させ、次に、それぞれの糸を上下切り返るため下方の経糸を上糸の外側で棒に糸に絡め、横糸を通す。その毎に糸の絡んだ棒を上下させ織りを進めるといいます。
原始的なそうこう装置を組み込んだものといえます。
横糸は、ひ、おさ、シャトルなどと呼ばれる道具に巻き付けられ、糸通しという単純作業が容易になりました。
これで、織り機の原型ができあがったといえましょう。

糸の素材についてですが、最初は入手が自然と容易な植物繊維が多く、ワタ、カボックのように植物の種子の綿毛やコウゾ、シナ、フジ、クズ、麻などのように幹や皮の繊維を利用していたようです。
動物では、ウールと呼ばれる羊毛、カイコなどが用いられました。

もう一つの柱であります染めに関してですが、最初は草木の汁を使った色づけが中心でしたが、飛鳥から平安時代にかけて、染め、色彩への関心も高まり、それまでの大陸の影響から抜け出し、日本独自の色彩感覚が生まれるまでに なりました。
例えば、植物名から名づけられた日本独自の色名、色の重ねなどがその例です。このころ匂いは同色の濃い色から薄い色へ移ろいゆく様をいったといわれています。まさに感性的な世界が培われた時代のように思われます。

その後、染めは幾多の試行錯誤の後、染料と媒染の関係で色を固定する技術を確立しました。染めという字は水に九十八回にそそぐことからできたといわれるほど、複雑な工程のものもあったといわれています。

特に江戸期には、日本各地に独自の風土に根差した染めや織りが生み出されていた。

その中、藍染めは広く普及しており、明治初頭、日本を訪れた英国の化学者アトキンソンは、藍の色をジャパンプルーと名づけ、ラフカデオハーンは藍染めの暖簾や仕事着がみられる日本の風景を愛しました。
明治という時代は、日本が西洋文明に追いつくべく近代化を急いでいる時でした。近代化した今、藍染めは再び脚光を浴びています。

織物文化には、文様や色彩、装飾といったデザインへの広がりがあります。身を飾るということは、自然・宇宙の中で自らの生の痕跡、証ととして、そして天とつながる元初への思いがこめられているのではないかと、との説を読んだことがあります。それは、コスメティックの語源がコスモスにあることから想像できると思います。

宇宙や元初への回帰、天女、羽衣伝説はそんなことを連想させます。

他のいのちと引き換えに暮らす我々ですが、講習会をきっかけとし、自然のあやにふれ、暮らしの中のみどりを考える、環境教育のための染め織りに皆様の力を借りながら挑戦したいと思っておりますので、ご協力よろしく申し上げます。

<最近思うところ>花菖蒲雑感(1998.6都道府県展望・いきいきライフ趣味の園芸)

梅雨時、凜とした姿に色鮮やか花をつけるハナショウブ。アヤメ科の植物で、日本で改良された世界に誇りうる純国産の園芸植物です。学名はIris ensata, Thunb. var. hortensis, Makino et Nemoto.

<江戸園芸の花・花菖蒲>

ハナショウブが親しまれるようになったのは、江戸時代以降です。それまでは同じアヤメの仲間のカキツバタが主流で、尾形光琳の「燕子花図屏風」の傑作や、万葉集、伊勢物語などにこの花を詠んだ名歌が残されています。

その理由は、生育地に深い関係がありました。カキツバタは、当時の文化の中心、近畿圏にも自生する身近な花でしたが、ハナショウブの原種となったノハナショウブは、中部以北に自生しており、都人には広まりませんでした。その後、カキツバタが自生する水湿地は開発され、文化の中心も移りました。

江戸期に入り、ハナショウブは園芸的に改良が加えられ、丈夫で、花の色形も多様なものとなり、一気に普及しました。広重の絵や「名所江戸百景」に堀切の花菖蒲園の様子が紹介されるほどで、その後、肥後系、伊勢系といった地方固有の園芸品種、文化が定着するまでになりました。

今日では、全国各地に花菖蒲園ができ、季節の花として広く親しまれています。また、アメリカから里帰りした花も出現するなど、国際化しています。ちなみに当相談所のある水元公園にも花菖蒲園があり、規模は都内最大です。

<虹の花・花菖蒲>

ハナショウブは宿根草で毎年株を大きくしながら花をつけます。しかし、4年目以降は株に衰えが始め、株分けによる更新が必要となります。ここで鉢栽培の例を紹介します。

株分けは、花期直後の梅雨期に限ります。手順は次のようです。①葉を3分の1に切りつめ、根の土を落とし、子株に平均的に根がつくように根茎(芋状のもの)を切り分けます②畑土とピートモス半々程度の土を入れた9センチポットに仮植後、浅い腰水で管理し、根づかせます③8月に15センチ鉢に本植えします。

管理は秋の施肥が重要で、8月下旬から10月下旬にかけて月1回、油粕の親指大のものを鉢に2個与え、養分を蓄積させます。冬と春は油粕を少量施す程度で十分です。なるべく日当たりのよい場所に置き、乾燥させないように注意しましょう。

ハナショウブは、交配も容易で、自分だけの新品種も可能な植物です。開花直後、雌しべに花粉をつま楊枝などで押し込み、自家交配させれば、1株からでも育種できます。

全国で余剰となった株を活用した地域交流、町おこしも考えられます。休耕地を

利用して花の名所を作る、水田脇に数条の花の路を作るなど。これらの花や稲露が梅雨空を晴らす郷土の輝きと人々には映るやもしれません。
学名irisは虹の意だといいます。

<最近思うところ> 季節の色を染め織り成す (1998.5東京消防・みどりと遊ぶ)

ジャパン・ブルー(日本の青)。
かつて日本中で見られた藍染めの青のことです。アイに限らず、自然の素材を使った染織りは、多くの色名や織り模様を生み出すなど、日本人の感性に育まれ、美意識を培ってきました。

ヒトは、動物の毛や植物の繊維を撚り、縄にすることから始め、糸を紡ぐまでになりました。そして、箆や籠を編む技術とともに、布を織ることも身につけました。また、草木から、さらには鉱物から、天然の色を引き出しました。染織りには、人間が他のいのちとの引換えに得た、時間を超えた自然との交流が息づいています。

草木染めの基本は「染色」と「媒染」の二つの処理です。

染色植物には、ヨモギの葉、タンポポの花、ヨウシュヤマゴボウの実、タマネギの皮、ドライハーブなど多様で、季節や材料の鮮度を問いません。庭仕事や料理で発生する身近なもので可能です。生材料は染め糸や布と同重量、乾燥材では2分の1程度の量が必要です。

また、色だし、色づけの媒染処理には、手軽な材料として、木灰の上澄み液があります。これは木の中のアルミナ、アルカリ成分を活用するもので、明るい色に仕上がります。渋味出すには錆釘と酢で作った液で可能です。この他、クロム、銅などの媒染で深みや濃さが増します。媒染剤は染め糸や布の100分の1の重量を目安にします。

>染める素材は、植物、動物、化学繊維に分けられますが、動物系がよく染まります。特に絹は前処理が不要で、容易です。

手順には「染色」「媒染」をそれぞれ別の器で行う方法と一つの器で済ます方法とがあります。

家庭では、簡便な同浴染色法が効率的です。まず、沸騰状態で草木を30分程度煮出し、その液に水、媒染剤、布を入れ、沸騰させ、弱火で1時間弱煮込みます。ここまで一気にこなすのがポイント。2時間以上そのまま自然に冷ました後、よく水洗いし、陰干しで仕上げます。

なお、「織り」には機道具と多少の技術習得が必要です。「裂き織り」が初心者向き。当相談所でも染織り講座を行います。

染織りの歴史に思いを重ね、自分の色、季節の色を染め織り成す。楽しく、暮らしに豊かな彩どりを添える行為です。

ラフカディオ・ハーンは来日した時、横浜の風景を青味がかかったものと表現しました。それは、失われ行くジャパン・ブルーを予感しての心象だったのでしょうか。それとも日本の輝き、感動の色だったのでしょうか。百年経た今、日本瞥見やいかに。

<最近思うところ>ハーブ雑感(1997.11東京消防)

草花を手軽に育ててみたい。花も実も楽しみたい。さらにそれを暮らしの中で役立てることはできないか。そんな欲張りに応える草花としてハーブがあります。

ハーブは一般的に薬用効果や香りがあり、料理に使える植物といわれています。

ハーブは本来、バジル類、ミント類、ヒソップ、コリアンダー等の草本をさしていましたが、現在では根菜類、スパイスなどの有用植物も含めた広い定義がなされているようです。このような定義でいえば、当然日本にも日本なりのハーブがあります。ハッカ、シソ、サンショウ、ショウガ、アシタバ等々。

今回は、目的別に代表的なハーブを紹介したいと思います。

①育てる(ガーデニング)

ナスタチューム、フレンチマリーゴールド、チャイブ、セイジ、ミント類、カモミール等。一緒に植えて、生育上好ましい影響を与えあう植物の組み合わせで、ナチュラルに育てましょう。

②作る(ハーブクラフト)

ラベンダー、ローズ、ジャスミン、ベルガモット、マートル、センテッド・ゼラニウム等。以上はポプリに向くハーブですが、この他、染めやフラワーアレンジメントに利用されるハーブもあります。

③楽しむ(美容・健康)

ソープワート、ローズマリー、ヒソップ、チャービル、レモンバーム等。以上は石鹸、浴剤向き。美容や医薬効果のあるハーブもありますが、専門家の指導を受け、利用した方が安心です。

④食す(クッキング・ティー)

レモングラス、レモンバーベナ、スイートバジル、タイム、ワイルドストロベリー、ドクダミ、ダンデライオン等がティー向き。料理にはバターやチーズに混ぜたり、オイル漬け、お菓子、サラダ、スパイス、臭み消し、薬味、刺し身のつまとハーブの活用は多様です。

今は「癒し」の時代ともいわれています。

地球環境は病み、高齢化社会を迎えようとしています。このような中で、人間の五感を自然に癒せるハーブやそれを使ったガーデニングへの関心は、今後ますます高まるものと思います。

人類は200万年もの前から植物とつきあいはじめ、その間、多くの犠牲の上に、植物と仲良くつきあい、生活に取り込む知恵を蓄えてきました。

草花を楽しむという小さな遊びですが、自分を癒し、地域の人とのふれあいの輪をつくるきっかけともなります。

そしてそれが、安全でうるおいのある社会づくり、助け合いの環として活かされればと思います。

<最近思うところ>戸山公園相談所だより(1997.11.都市公園)

1.はじめに

どこの相談所も立地上の長短をあわせもつ。当相談所の長所といえば、情報活用・運営態勢面で図書室や管理所との相互協力が容易な点である。短所となると、アクセスの悪さ、知名度の低さからくる、来館者の限定があげられる。

2.心がけていること

相談所の運営にあたって、次のような点に留意している。

①あいさつの励行②誠意ある対応③限られた予算・人員の有効活用④ニーズ反応とメッセージ発信、などである。

特に③④に関しては「今あるものは活かす」「作りながら片づけ、片づけながら作る」という姿勢で鉢物のディスプレイや企画展示にのぞみ、来館者に旬な情報の提供と直営による柔軟な運営をめざしている。

具体例1<オープン>

玄関や庭は内部と外部とをつなぐ大切なところである。周辺道路の清掃、生け垣手入れ、木目細やかな花壇管理、花鉢の適所配置等により、外から眺められる庭を意識し、日々新たな景色で利用者を迎える努力をしてきた。

さらに、近隣の方が育てた盆栽や絵画などを展示に取り込むことにより、花を囲んだ地域の「花端」を形成し、多くの人に親しまれる施設づくりに励んでいる。

具体例2<リンク> 当相談所では、身近にあるものを有効活用すること、手作りを心がけてきた。

例えば、八王子霊園からでてきた孟宗竹の展示補助材への活用、株分け等の繁殖植物による展示型育成、他施設(図書室、他の相談所、環境学習センター)の展示教材の活用等、身近なストックの再活用で多様な展示形態を試みている。これは、人・もの・情報のリンケージ形成のきっかけともなる。

また、運営面でのリンク、フォロー企画もある。

例えば、講習会は回数や受講人員に制限がある。そこで当相談所では、人気ある講習会では、参加漏れした人をフォローする目的で、講習会后、受講した人に声をかけ、関心ある人の自主研鑽の場を設けた。毎月開催されている「ハーブ懇談会」がそれである。ここでは経験の多少にかかわらず、和気あいあい、情報交換、技術交流の場がうまれつつある。

この他、繁殖等により余剰となった草花は利用者に配布し、都市緑化基金への寄付を募っている。現在、毎月第1日曜に行っている「花の市」として定着しつつある。

3.これからのあり方

緑の普及には講習会、相談、自主活動支援、助成、展示等、様々な活動形態がある。相談所はこれらをコーディネートし、活性化につなげる遊撃隊ではないかと思う。公園や地域等との連携、栽培から利用までの一貫講座、環境学習等の視点を大切にしたい。

そして、凜とした中に親しみとやすらぎある相談所づくりをめざしたい。

<最近思うところ>バーチャルを超えて

わたしたちの人生はみな、世の中という大海原に航海する帆かけ船にもにています。

あるときは志という帆を高く掲げ、天空の星を道標に、潮や恒常の風に乗って、目的地に順調に進みゆくこともできます。また、あるときは嵐に帆を潜め、満身の五感を研ぎ澄まし、嵐が過ぎ行くのを堪え忍ぶことも必要になるかもしれません。

これからみなさんは、青春という夢や悩みの多い、人生の中でもっとも変化ある時期をむかえます。そして、今まで以上に自分の責任や役割を考えながら、実社会により近づいていく時期といえます。現実の社会は窓越しの景色とは違

い、風が肌身にあたります。バーチャルリアリティー(仮想現実)の世界とは異なります。

現実の壁を突き破るには、多少の傷つき、痛みを伴うことがあるかもしれませんが。外界の確かな温もりや厳しさを知ることにより、表面的な快樂ではない、他の人の痛みや喜びが分かる人間になっていきます。バーチャルな社会では、自身の自分には結果責任が具体的にはありません。しかし、現実では、自分のとった行動には何らかの責任を伴ってきます。これからは、より実社会に近づく訳ですが、単に興味本位に走ることなく、今まで以上に自分の行動に対する責任や社会での役割を考えいくことになるのです。

そして、混沌とした現実の中、自分の志をたもち続けるには、経験に裏付けられた知恵や、粘り強さ、チャレンジ精神が必要であります。これは、未来を信じる、互いを信じあうという姿勢、あせらず、たゆまず、一所懸命にというひたむきな態度から生まれるものと思っています。時には悩み、迷いがでます。そんな時、家族や友人、先生や先輩など頼れ、安らげる人とのつながりを、いろんな機会を活かし、大切にしていってください。
(中学校卒業式に際して。平成9年3月)

<最近思うところ>「志」をもとう

今の時代、志を持つことが大切だと思っています。野心と志は違います。野心が他者を排除したうえでの利己的欲望に発するのに対し、志は自分や他の人の救済、向上を目指した意志の現れだと思っています。

若きみなさんの清き志は、みなさんの未来でもあります。なぜなら、未来を拓のはあなたがた自身であるからです。みなさんの志が未来をひらくのです。どうかみなさん、若いときに志を立て、それを大切に守り、追いかけてみてください。山の石清水の一滴が、川の流れとなり、大海につながるように、よい方向に未来が開けてくると思います。また、そのようになるように努力するのが、われわれ大人の役目でもあります。

志を立てるということは、世の中での自分の使命を自覚することでもあります。

清新1中は、荒川河口近くにあります。ここでは潮の満ちひき、雨水、塩水が行き来します。山と海とをつなぐ位置でもあります。上流の清冽な流れも、世の暮らしの汚れを背負いながら、海に流れ出で、その大きな懐でゆっくりと浄化されます。その水も、外洋で雲となり、大気運動でまた山にも雪や雨をふらし、地球的規模で巡りめぐっています。卒業生の皆さんは、清新1中、この名のとおり、深山の流れのごとき清冽な志と、汚れを清め新たにす、豊穡で大きな海のごとき気概をもって、これからの自分たちそれぞれの道に向かってください。

皆さんが、世界各地で、そしてまた、地域の隅々まで思いを巡らしながら、あらゆる分野で活躍してもらいたい。そんな思いで、両親や先生方は今日まで頑張ってきたのではないのでしょうか。これからも、その思いは変わらないと思います。自ら立てた志を捨てることなく、皆でまた再会することを楽しみに、現実の場を互いにがんばりぬいていきましょう。(中学校卒業式に際して。平成9年3月)

<最近思うところ>「らしさ」を「かたち」にしよう

春の陽射しにあわせるかのように、木々の芽も膨らみを増してきました。その後のあるべき姿がここに凝縮されているかと思うと自然の造形力の巧みさに驚かされます。

草木がその草木らしくあり、鳥がその鳥らしくある。これらは自然のなせる業ですが、人は人らしくあるとともに、その人らしさ、自分らしさを大切にしています。らしさの表現とは自分の思いを形にすることであり、また、他との関わりの中から自己を再認識する作業でもあると思います。

思いを形にする。それは言葉や表情、態度等にでます。その言葉も、語源がことだま、言の葉にあるといわれるように、言葉は心の現れでもあります。こころという形なき思いを言葉によって他の人に伝えるためには、互いにわかりあえる表現作法、型を身につける必要があります。型を身につけてはじめて形にすることが可能のように思います。そして、それはより多くの人とのまごころの対話によって、より美しくしていけるものと思います。

春芽吹く草木も、寒さを知ってはじめて、春の温もりに感応します。わたしたち風景の会としましてもそれぞれの住む地域で、みどり豊かで、温もりと輝きのある言の葉が満ち溢れたそれぞれのふるさとづくりをめざして、「らしさ」を「かたち」にする地道な活動を展開していきたいと思います。(平成9年3月)

[BACK](#)

[NEXT](#)